

テモテへの手紙第一3章1-13節 「教会の奉仕者」

1A 監督の資格 1-7

2A 執事の資格 8-13

本文

テモテへの手紙第一3章を開いてください。私たちは、3章の1節から13節までを見ていきたいと思います。監督の資格、また執事の資格についてです。教会において、人々の上に立つ奉仕についての内容になります。

パウロが今、自分自身でマケドニアに向かう時にテモテはエペソに留まるように言って、そこにある大きな問題に取り組むように指示を出していました。違った教えを説いており、それによって協道にそれで無益な議論に発展していたという問題がありました。教会がキリストの真理を明かす存在として立てられているということを忘れることなく、その柱が取り除かれることがないように、テモテに指導を与えています。そして、全体的なこと、公に教会が行なうべきことについて話しました。それがすべての人のために祈ることであり、全ての人を救いたいと願う神の御心にかなうものでした。特に、神によって立てられている王や高い地位にいる人々のために祈ることは、とても大切です。

さらにパウロは教会の中における秩序について話しました。男は祈るべきである、きよい手を上げて祈るべきであることを話しています。怒ったり、言い争ったりすることなく、それを行なうべきだと言っています。それから、女に対しては慎み深く身を飾って、良い行いを飾りとしなさいと勧めています。さらに、女が男を支配してはならないこと、静かに、よく従う心をもって教えを受けなさいという指導もしています。テモテへの手紙、またテトスへの手紙もそうですが、健全な教え、敬虔、慎み深さ、愛や希望、純粋な信仰、神の救いなど、教会が教会たらしめる本質を教えています。

1A 監督の資格 1-7

そして今晚は、教会の指導的な働きをしている人々がどのような資格を持つべきかについて話していきます。

1 「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それは素晴らしい仕事を求めることである。」ということばは真実です。

「監督」という言葉ですが、ギリシヤ語のエピスコポスという「よく見張る」という言葉からのものです。教会がエルサレムで聖霊によって誕生してから、教会の運営について責任を持っていたのは使徒たちでした。信者たちは、使徒たちの教えを堅く守り、祈り、交わりをし、パンを裂いていま

した。そして彼らは祈りをささげ、使徒たちは主のことばを伝えていました。そして彼らには、財産を売り払って、それを教会の仲間で分け合うということもしていました。

けれども、そのことで問題が生じました。使徒 6 章において、ギリシヤ語を話すユダヤ人たちのやもめが、ヘブル語を話すユダヤ人たちのやもめより、配給においてないがしろにされているという不満が出てきたのです。そこで、使徒たちは弟子たち全員を集めて、重要なことを話します。「私たちが神のことばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。(2 節)」使徒たちが、祈りと主のことばの奉仕が、食卓のことで奉仕することにより、ないがしろにされてきてしまったのです。そこで、兄弟たちの中から七人を選んで、彼らが祈りと御言葉に集中できるようにしました。そこから、ピリポやステパノという伝道者が生まれたのですが、その七人が「仕える者」つまり、執事となっていったのです。

その後で、使徒たちとほぼ同じ働きをする者が「長老」と呼ばれています。アンティオケに、モーセの割礼を受けなければ救われなかったユダヤ主義者がやってきたので、その決着のためにパウロやバルナバはエルサレムに戻りましたが、「この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった。(使徒 15:2)」とあります。したがって、そのエルサレムにおける教会会議において、異邦人が救われる方法について、それがただ信仰によって心が清められるのだ、律法を彼らに負わせてはいけないという議決が聖霊によって出ましたが、その中で長老たちが関わっていたのです。「長老」というのは、読んで字のごとく「年老いた者」という意味ですが、旧約聖書から使われている言葉で、霊的な成熟度を表す言葉であり、御言葉の教えについて、教会の中で霊的権威が与えられている人たちです。

そして、長老たちが集められた時に、パウロは彼らに、「監督」という言葉も、また「牧者」という言葉も使って話しました。まさに、テモテが今、任務についているエペソにおいてですが、彼が港町ミレトに着いた時に、急いでいたので自分がエペソに行くのではなく、長老たちをミレトに呼んで、エルサレムに向かう前に、最後になるかもしれない言葉を伝えたのです。彼が多くの反対や苦しみの中でも、はばかることなく神に対する悔い改めと主イエスへの信仰をはっきりと伝えたということ、それから、神のご計画の全体を、余すところなく知らせておいたということを伝えました。そして長老たちにこう話します。「使徒 20:28 あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。」神がキリストにあつてその流された血によって買い取られた教会を、あなたがたは牧しなさいと命じています。それから、その群れの監督に神がお立てになったのだと言っています。

ですから、長老、牧者、監督はみな、同じ人々のことを指していました。ここ 3 章 1 節にあるように、どの地位についているかという視点ではなく、どの「働き」をしているか、その働きのことを説明しているに他なりません。長老は、霊的に権威が与えられている者です。牧者は、旧約時代にお

いては王に対して使われていました。羊に寄り添い、その群れを養い、また狼から羊を守るという意味で、彼らが羊飼いまは牧者と呼ばれていたのです。それから、監督は「群れの全体に気を配る」という言葉に表れているように、全体をよく見張っているという意味合いで使われています。

それで、教会に監督を立てなければいけないのですが、そのための資格をパウロはここで話しています。テロスへの手紙にも、「私があなたをクレテに残したのは、…私が指図したように、町ごとに長老たちを任命するためでした。(1:5)」と言っていますが、人が任命されるのに必要な資質を教えています。

ところでパウロは、テモテに対して、「真実です」という言い回しを使っています。パウロはこれを何度となく使っていますが、1章15節を見てください、「「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。」とありますね。エペソの教会において、この言葉に対しての圧力、その真理から脇道に逸れる流れがあったから、こんなことを言っているのだと思います。罪人を救われるためにキリストが来られたということ、これこそが私たちが生きている証しであるはずなのに、律法についての論議をしていたということが起こっていたようです。

したがって、ここにおける言葉も、背後に何かがあるようです。「素晴らしい仕事を求めることである。」と言っていますから、反対に言うと、すばらしくない仕事なのだという雰囲気があったのではないかと思います。監督も、また次に出てくる執事も、地道で静かな働きです。エペソにおいては、それよりももっと目立つような働きがもてはやされていたのかもしれませんが。律法の知識をひけらかすような教え、あるいは奇蹟やしるしの賜物があったのかもしれませんが。しかし、監督の働きは必ずその後始末をするような否定的な側面があるのかもしれませんが。

健全な教会生活をしようという話は、必ずしも受けないでしょう。それよりも、何か素晴らしい説教者が来ている、礼拝賛美のグループがやって来た、これこれのセミナーがある。けれども、いつも変わらない神の家族がいて、そこにいる一人一人の霊的成長を見守ることは、「ああ、なんかいつもと変わらないな。」という思いが入ってくるかもしれません。ある牧師さんが、興味深いことを話していました。彼はキリスト教の超教派の団体の指導的立場に以前いました。その経験から話しておられましたが、いろいろな教会に招かれて名説教者として知られていたとしても、ある地域教会の牧会者になったら、その説教がそこまですばらしい訳ではなかった、他の牧会者とさほど変わらなかった、ということです。同じ会衆に対して御言葉を取り次ぐのです、これは目立つことはないけれども、巡回して感謝されるより、はるかに目立たず、しかし本質が問われ、労苦がともなう働きであります。

しかし、私たちは同じ家族で同じご飯を食べて、それで各人が成長することは何にもまして喜ばしいことを思い出さないとはいけません。いろいろなところに回ってグルメを楽しむより、もっともっと

嬉しいことのはずです。そのグルメの料理人が家庭で、その娘や息子たちにどれだけおいしいご飯を作れるのか？ということです。これはとって大切なことで、その霊的成長の中核となる働きであります。ですから監督は、素晴らしい仕事をしているのです。

そして「つきたいと思うなら」という言葉があります。主が自分を罪から救ってくださった、そしてこの知らせを何としてでも伝えたい、このどうすることのできない抗えない熱心さや願いが、その召命の重さによって、時として押しつぶされそうになりそうな時も、それでもあきらめられないという思いが、神に召された者にはあります。スポルジョンが言いました。「天よりの召しの最初のしるしは、そのわざに対する熱心な願い、そのためにはすべてを捨てて願みないという欲求である。教役者への真の召命には、神が私たちの魂になされたことを他の人々に語りたいたいという、抗することのできない、圧倒的な願いと激しい渇きがなければならない。」¹この世においては、願ってしまうものはたくさんあります。テモテへの第一の手紙の中でも、金銭を愛してしまう人たちがいます。あるいは、知識や能力を得たいという強い願いを持っている人もいるかもしれません。しかし、キリストが私の魂にしてくださったこと、どんなに自分を自己点検しようとも、ここから金銀がなくてもやっていきたいとあきらめられない強い願いであります。

2 ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、3 酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。5 ..自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう。..

監督としての職務は、2章においてあったように、公の礼拝においてそれを司ることが一つにあります。その他に2節にあるように旅人をもてなすこと(当時は、巡回伝道をしている人々が多かったです)。そして、教えることもあります。また金銭に無欲とありますので、金銭を扱うことも含まれます。そして教会を治めることがあります。まだ読んでいませんが、7節には教会外の人たちに対して代表していること、教会の顔になっていることもあります。

それらすべての前に、「非難されることがなく」とありますね。これを言い換えると、監督に対して非難する、クレームを付ける人々が多いたということが言えるでしょう。そのことについて落胆することなく、むしろ非難されていても、実はその証拠がない、身は潔白であるという生活をしているかどうか、ということです。5章19節には、「長老に対する訴えは、ふたりか三人の証人がなければ、受理してはいけません。」とあります。訴えや非難されることはやむを得ないことです。私たちの主イエス様は、ご自身に向けられた数々の非難を持っておられました。けれども、証拠や証言がないのです。そのようであればいけない、ということです。

¹ <http://ameblo.jp/justincase/entry-11062990771.html>

もちろん、これは罪のないということではありません。パウロは先に、自分自身が罪人のかしらで、神の憐れみによって忠実な者と認められていることを話しました。むしろ、自分の罪深さを自覚し、悔い改めつつ、へりくだって歩み、その姿を周りの人々に見せることによって手本になっていることは、福音宣教者のあるべき姿です。この務めを担えるのは、あくまでも自分の弱さに働きキリストの恵みによってであります。しかし、社会的といったらよいでしょうか、公に、そしりを受けるような行動を行なっているようなことのないようにしなければ、神の救いのご計画を知らせる教会の使命を果たすのに妨げになります。

次に「ひとりの妻の夫であり」とあります。これは監督が既婚者でなければならないという意味ではありません。このことを話しているパウロ自身、彼は独身でした。そうではなく、当時の倫理的な基準では、二人以上の女がいることは当たり前だったので、そのように話しています。妻の他に関係を持っている女がいたのです。しかし、そうではなく、主が一人の男と一人の女を結ばせたと言われるように、一人の妻なのだということです。

次に「自分を制する」とは、「極端に走らない」という意味合いがあります。感情面の安定を話しているでしょう。教会にはいろいろな不安定要因があります。分裂の危機があったり、経済的側面が窮してきたり、家庭にさまざまなしわよせが来たりと、心理的な圧迫があります。けれども、そのような時でも自暴自棄にならず、主にあつて心の安寧をいただき、極端に走らず、バランスを保っていることです。そして、「慎み深く」とは、知性における明晰さであります。教会で起こっている様々な事を総合的に考えて、長期的な視野に立ち、主から知恵をいただきつつ決断をしていかなければいけません。自分の気分や、そのときの思いで動くような人は監督になることはできません。そして「品位があり」というのは、行動面のことです。秩序を保った行動を取れているかどうかであります。

そして感情や精神的な安定、行動における落ち着きの他に、「よくもてなし」という親切な行為、慈善行為があります。これは巡回伝道者のような信者をもてなすこともあれば、困っている人々に助けの手を伸ばす親切も含まれるでしょう。

そして「教える能力があり」とあります。これは、必要不可欠な能力です。エペソ4章11節には、キリストが、「ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。」とあります。ここの「また」というのは、点にして読んでよい接続詞です。すなわち「牧師教師」なのです。牧師であつて、教えられないということはありません。教師であつて牧師ではないということはあるけれども、その反対はありません。再びスポルジヨンの言ったことを引用しましょう。「牧師になりたいという熱心な願いとともに、適切に教える能力、その他の公の教師としての任務に必要なある程度の特質を備えていなければならない。」

そして、「酒飲みでなく、暴力をふるわず、」とありますが、その通りです。酒飲みの後で暴力が来

ているのは、酒には暴力が付きものだからです。暴力と言っても、ただ殴るだけでなく、周囲の人々を顧みない、しなければいけない責任を果たさない、ネグレクトも含まれます。そして、「温和で、争わず」は、言い争いが絶えないエペソにある教会で、特に聞かなければいけない言葉だったでしょう。争うこと、こうしたものから離れたがる人、平和を求め人でないといけません。そして、「金銭に無欲で」とあります。6章で、金銭を愛する者たちへの警告の言葉があります。このことも、エペソの教会で起こっていたことだと思われま

そして4-5節に、家族をよく治めている人という資格があります。つまり威厳を持っているか、力によってではない、主から与えられた権威をしっかりと愛をもって示しているか、そのことによって子どもを治めることができます。ここで、大事なことは家庭で治めることが、そのまま神の家族で治めることにつながっていることです。5章8節にも、親族や家族を顧みない人は不信者よりも悪いとありますが、家族という単位は教会の証しにおいて不可欠な要素です。家族伝道ということが、最も大きな課題です。しかし家族伝道において、あるいは信者であれば家族礼拝において、その実質があれば、それはその人が神の教会も大事にしていることを表しています。

6 また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。7 また、教会外の人々にも評判の良い人でなければはいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。

「信者になったばかりの人であってははいけない」というのは、高慢になってしまい、悪魔と同じさばきを受けるとあります。あのルシファーが陥った過ちは、高慢でした。「神のようになろう」という過ちです。信者になったばかりの人は、教会において治める働きをすることが、自分自身が霊的にも高められていると勘違いする可能性が大です。主の福音が広まり、それに応答して多くの人が信じていく中で、すぐに誰かを奉仕の働きをさせてしまう誘惑があるでしょう。しかし、その奉仕によってその人をだめにしてしまう可能性があります。パウロが言っているように、主の知識が増えれば増えるほど、本当は自らの足りなさ、神の恵みとあわれみの必要性を覚えます。このへりくだりの中で人々を導きます。信者にはこの経験が必要であって、これは主との歩みが長ければ長いほど、与えられるものです。信者になったばかりの人が監督になってはいけません。

さらに、「教会外の人々にも評判の良い人」とあります。さもないと、そしりを受ける、これは悪魔がすることです。神の教会をそしるのは、悪魔がもっとも喜ぶことです。神の救いのために教会が建てられているのに、その働きを妨げることになるからです。教会というのは、この地から浮いたような存在ではなく、地にしっかりと足をおろした存在であります。落ち着きがあり、秩序があります。これは世と妥協するということではなく、すべての権威が神から来ていることを認めることです。したがって、教会外においても良い評判があることによって、社会から乖離しない教会を持つことができます。

2A 執事の資格 8-13

次に、「執事」です。先ほども話しましたように、教会の庶務を行なう人です。もともとは「仕える」という意味です。

8 執事もまたこういう人でなければなりません。謹厳で、二枚舌を使わず、大酒飲みでなく、不正な利をむさぼらず、9 きよい良心をもって信仰の奥義を保っている人です。10 まず審査を受けさせなさい。そして、非難される点がなければ、執事の職につかせなさい。

執事もまたこういう人でなければ、と書いてあります。「また」というのは、監督と同じような資格があるということです。その資質は、「謹厳」であるということです。これは、誠実である、真面目であるという意味合いの言葉です。教会についての具体的な事から取り組んでいきます。したがって、信仰においては喜びや楽しみを持っていながら、しかし一種の真面目さ、正直な態度がなければ、容易に誹りを受けかねないことをしてしまいます。

「二枚舌を使わず」というのは、よく理解できますね。長老がいて、信者がいます。長老には、これこれのことを話して、信者には別のことを話すということをしてしまうことがない人、たとえ不都合なことを言わなければいけなくても、きちんと報告する人でなければいけません。「大酒飲み」ではないというのも、監督と同じですね。監督のほうが「酒飲みではなく」とありましたので、基準が高いです。それは、監督は霊的な権威を持っており、人々の模範にならなければいけないからです。そして、「不正な利をむさぼらず」とありますが、執事は会計を取り扱います。ここで不正をしてはいけません。

さらに、「きよい良心をもって信仰の奥義を保っている人」とあります。執事という職は、ともすると、教会で必要なことがあるから、それを埋めるために、だれでも良いからやってもらうという傾向を持ちます。だれがやっても、別に同じだからということで、その人の霊的素質をないがしろにしてしまいがちです。しかしパウロは、執事にはこれまで彼が話してきたように、神の救いについて「きよい良心」をしっかり持っている人なのだということです。そしてイエス・キリストの真理についても、その奥義、中身をしっかりと持っている人であるからこそ、その務めを行なうことができます。

そして「審査」を受けさせます。この審査というのは、落とすための試験のような審査ではなく、励ましも含めた審査だと思えます。その中でその人に霊的素質があるのか確かめることです。

11 婦人執事も、威厳があり、悪口を言わず、自分を制し、すべてに忠実な人でなければなりません。12 執事は、ひとりの妻の夫であって、子どもと家庭をよく治める人でなければなりません。

ここの訳は、下の引照にあるように、「執事の妻」と訳したほうが良いかもしれません。しかし、女執事も存在します。ローマ 16 章 1 節に、パウロの手紙を受け取りローマに持っていく女執事ふ

いべの姿が出てきます。ですから、執事の妻でも女執事でもどちらでもよいでしょう。

その人もまた「威厳」がなければいけません。これは、木真面目さ、実直さ、そこから自然に人々が抱くその人に対する尊敬です。その次に「悪口を言わず」とあります。男に対しては、酒を飲む、争うということがない人という資格でありましたが、女に対する資格と言ってもよいでしょう。テモテへの手紙には、若いやもめが言ってはいけないことを言う、という話もパウロはしています(5:13)。この分野においてしっかりと口を守る人が必要です。おしゃべりをして、変なうわさ話を広めてはいけない、ということです。そして「自分を制する」ことは、監督の資格にもあったように、感情における安定です。何かが起こると、信仰によってではなく感情に走ってはいけません。そして、「すべてに忠実」でなければいけません。どんな小さなことにも、きちんと責任を果たしていかなければなりません。ある時にやって、またある時にはやらないという不安定な人はこの務めは担えません。

そして執事に戻りますが、監督と同じでひとりの妻の夫であり、子どもをよく治めています。ですから、執事も監督と同じように高い基準が与えられているのです。

13 というのは、執事の務めをりっぱに果たした人は、良い地歩を占め、また、キリスト・イエスを信じる信仰について強い確信を持つことができるからです。

「良い地歩」というのは、人の前でこれは尊ばれるということです。執事とは、イエス様のように仕える人です。もっとも目につかない、地味な働きです。しかしパウロは励ましています、このような人こそが良い地歩を占めるのだと。それから、信仰について強い確信を持つことができます。この奉仕を通して、主にあって成長できるのです。奉仕を通して、主のことを知ることができます。